

沖縄県立埋蔵文化財センター企画展

発掘調査速報展 2008

開催期間 7月29日(火)
～8月31日(日)

沖縄県立埋蔵文化財センター

もくじ

| | |
|-------------------|----|
| ごあいさつ | 1 |
| 平成 19 年度調査実施分布図 | 2 |
| 中城御殿跡 | 4 |
| 綾門大道跡 | 6 |
| 首里城跡「御内原北地区」 | 8 |
| 嘉良嶽東方古墓群 | 10 |
| 宮国元島上方古墓群 | 12 |
| 沿岸地域遺跡分布調査 | 14 |
| アンチの上貝塚 | 16 |
| 具志川島岩立遺跡西区 | 18 |
| 箕隅原A遺跡 | 20 |
| 基地内埋蔵文化財分布調査 | 22 |
| 沖縄県内遺跡出土遺物保存処理 | 24 |
| 発掘調査のきっかけ（契機）とは | 25 |
| 平成 20 年度発掘調査等予定一覧 | 26 |

凡例

1. 本書は、沖縄県立埋蔵文化財センターの企画展「発掘調査速報展 2008」を補完するものとして編集した。
 2. 許可なく本書の複製および転載、複写を禁ずる。

ごあいさつ

沖縄県内には、貝塚、グスク、集落跡や古墓など約2,500箇所の遺跡が確認されています。沖縄県立埋蔵文化財センターでは、先人が残したこれらの埋蔵文化財の発掘調査を行い、考古学的見地から検証した成果を沖縄の歴史・文化の研究に役立てています。

通常、発掘調査開始から出土品を整理し報告書を刊行するまで数年を要することから、前年度の発掘調査で得られた最新の情報をいち早く公開するため、「発掘調査速報展」を毎年開催しております。

今回の「発掘調査速報展2008」では、平成19年度に調査を実施した首里城跡御内原北地区発掘調査や綾門大道跡発掘調査、伊是名村具志川島遺跡群発掘調査、基地内埋蔵文化財分布調査、新石垣空港予定地内遺跡発掘調査、沿岸地域遺跡分布調査などの概要と主な成果について、出土遺物や写真パネル等で紹介しております。

嘉良嶽東方古墓群の発掘調査では、近世の風葬墓の下層から珊瑚織の混ざった白砂層と土層断面に地割れが確認されていますが、これは、地震と津波の痕跡を示すもので当時の自然災害を知る上で重要な手がかりとなる画期的な発見といえます。

また、綾門大道跡からは、地鎮具と見られる銅鏡が発見され、これらの成果も含めて紹介しております。

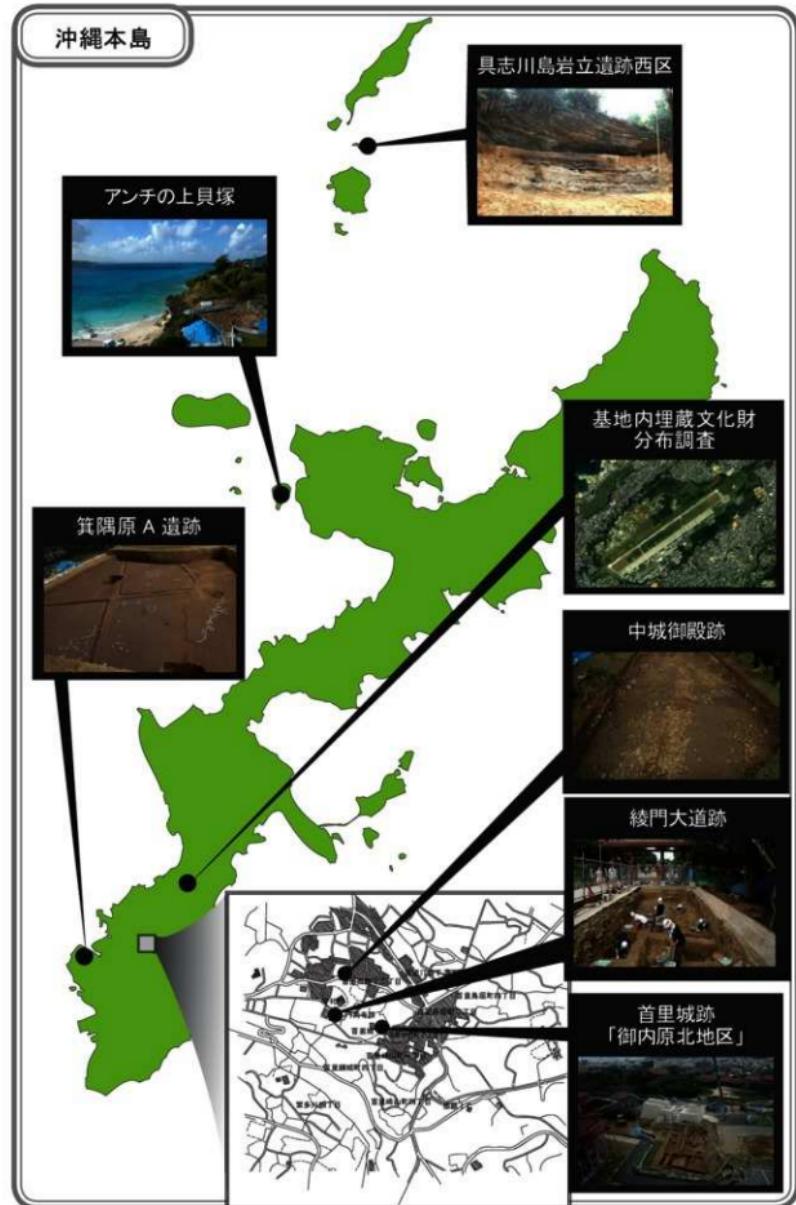
この速報展をとおして、多くの方々が当センターの発掘調査と埋蔵文化財について理解を深められ、その価値や重要性がより一層広く浸透することにつながれば幸いです。

2008（平成20）年7月29日

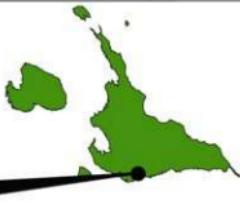
沖縄県立埋蔵文化財センター

所長　名嘉政修

平成 19 年度調査実施分布図



宮古諸島



八重山諸島

新石垣空港予定地
「嘉良嶽東方古墓群」



平成 19 年度発掘調査一覧

| 事業名 | 所在地 | 時代区分 |
|-------------------------------------|----------------------|----------------------|
| 具志川島岩立遺跡発掘調査 | 島尻郡伊是名村具志川島 | 縄文時代相当 (沖縄貝塚時代前期) |
| 県営首里城公園発掘調査(綾門大道跡) | 那霸市首里当蔵町・金城町 | グスク時代～現代 |
| 那霸西道路建設に伴う 箕隅原 A 遺跡発掘調査 | 那霸市鏡水 (自衛隊那霸駐屯地内) | 縄文時代～グスク時代 |
| 基地内埋蔵文化財分布調査 | 宜野湾市 (普天間飛行場内) | 近世ほか |
| 首里城跡発掘調査(御内原北地区) | 那霸市首里当蔵町3丁目1番 | グスク時代～近代 |
| 沿岸地域遺跡分布調査 | 沖縄県内 | グスク時代～近世・近代 |
| 県営首里城公園発掘調査(中城御殿跡) | 那霸市首里当蔵町1丁目1番地 | 近世～近現代 |
| 新石垣空港予定地内遺跡発掘調査 (嘉良嶽東方古墓群) | 石垣市白保嘉良嶽 1960 番地 | 歴史時代・中森期～近世 |
| 県道上地保良線道路改良工事に伴う 発掘調査(宮国元島上方古墓群) | 宮古島市上野字宮国 | 近世～近代 |
| アンチの上貝塚発掘調査 | 本部町瀬底島 | 沖縄貝塚時代後期 |

なかぐすく う どうん
中城御殿跡

事 業 名：首里城公園整備に伴う発掘調査

所 在 地：那覇市首里当蔵町1丁目1番地

時 代：近世～近現代

調査期間：2007（H19）年11月1日～12月28日

調査内容： 今回の調査は、県営首里城公園の復元整備に伴って、発掘調査を行いました。

中城御殿は、これまでに平成4年の国営首里城公園の公開に向けて、平成4年度から6年度まで沖縄県立博物館によって、中城御殿を取り囲む南・北と東側の石牆^{せきじょう}並びに石垣の整備に伴う発掘調査が行われています。しかしながら、今までに中城御殿の建物群がある部分の発掘調査は行われていません。

今回、旧沖縄県立博物館の前庭に東西に幅1m×21mのトレンチと「十」字状に交差するように南北に幅1m×20mのトレンチ、更に、旧館の南側に東西13m×南北6mのグリッドを設定し、現地表面から約70～80cmの地点から建物に伴う石敷の遺構と側溝と思われる遺構等が確認されています。遺構の遺存状況の確認に伴う発掘調査であることから、遺構面直上で調査を終了しましたが、遺構の状況から建物の拡張或いは建物の建て替え、若しくは中城御殿が建てられる以前の北谷御殿の建物跡と思われる遺構が重なり合っていることが分かりました。

出土遺物は、青磁や染付、釘（角釘）、瓦、本土産陶磁器、沖縄産施釉・無釉陶器、褐釉陶器等の人工遺物と、貝や獸骨等の自然遺物が得られています。

今後の調査では、平成19年度に確認した遺構の新旧関係を明らかにし、中城御殿の時期の遺構を中心に検出を行う予定です。



石敷き遺構の検出状況



遺構の検出状況

あいじょううぶみちあと 綾門大道跡

事 業 名：県営首里城公園発掘調査

所 在 地：那覇市首里当蔵町・金城町

時 代：グスク時代～現代

調査期間：2007（H19）年7月9日～9月20日

調査内容：綾門大道は、守礼門（1527～55年創建）から首里高等学校南西側道路付近にあった中山門（1428年創建）までの約450mの区間をいいます。この調査は復元整備を目的としたもので、守礼門より東側は、国指定史跡首里城跡の史跡指定地内であることから、文化庁へ現状変更許可申請の手続きを経て、許可後の平成18年度より調査を開始し、その範囲は守礼門東側から園比屋武^{そのひやぶ}御嶽石門前までの園路約20m区間となっています。

守礼門北東側の発掘調査で、綾門大道整備以前に構築された掘建柱住居跡（14世紀末～15世紀前半頃）の一部が発見されました。この住居跡の一辺は、長さ460cm（二間半強）で、両端の柱穴には柱を固定するために使用された根固め石が確認されました。

一辺の中間部分には、柱穴がなく石灰岩製の粗雑な礎石が1個配置されました。

また、住居内側の西半分からは炉跡6基が集中して見つかりました。この住居跡より上の堆積した層から綾門大道の排水溝の内側縁石が途切れながら約6.5m発見されました。この縁石を前年度に発掘された守礼門南東側の縁石と比較すると石の加工が雑であることが判りました。北東側と南東側で発掘された排水溝内側の縁石間の距離を測ると約9m（五間）ありました。その他に

綾門大道を普請（整備）する前に工事の安全を祈願する

目的で埋められたと考えられる完品の青銅製銘入鏡（「為善最榮」と読める）一枚と直径5cmの鍍金された円形菊花飾りの青銅製品一枚が接近して発見されました。



青銅製銅鏡



作業状況



調査区近景（西より）

首里城跡「御内原北地区」

事業名：首里城跡発掘調査

所在地：那覇市首里当蔵町3丁目1番

時代：グスク時代～近代

調査期間：2007（H19）年9月3日～2008（H20）年2月29日

調査内容：平成19（2007）年度の首里城跡発掘調査は、正殿裏手の北東角付近において約300m²実施しました。調査区一帯は、かつて女官居室の西側一角及び、淑順門南側の石階段が敷設されていた場所です。これらの創建及び撤去時期は不明ですが、調査により7時期に区分できる数種の遺構が検出されました。その内訳は、14～15世紀に相当する首里城の火災の痕跡が見える堆積土や造成層（第1・2期）、ほぼ同時期の基壇・礎石建物跡（第3期）、16世紀頃にあたる淑順門南側の石階段（第4期）、17世紀前半の生ゴミを捨てたシリ遺構（第5期）、19～20世紀の埋甕跡（第6期）、昭和25（1950）年創設の旧琉球大学本館前石積み（第7期）が主な遺構となっています。

出土遺物は多彩な陶磁器類のほか、金属製品や自然遺物も豊富に得られており、今後、首里城御内原の造営法や生活を復元する上で参考になるものと思われます。



調査区遠景（南より）



遺構検出状況（東より）



シリ連続発掘状況

嘉良嶽東方古墓群

事業名：新石垣空港予定地内遺跡発掘調査事業

所在地：石垣市白保 1960 番地

時代：歴史時代・中森期～近世

調査期間：2007（H19）年 10月 1日～12月 14日

調査内容：嘉良嶽東方古墓群は石垣市白保、カラ岳から南東方向約 500 m、南北方向に連なる崖下の岩陰に点在する古墓群です（写真1）。発掘調査前は岩陰墓 3 基が確認されていましたが、今回の調査によって 2 基の岩陰墓が新たに確認されました。5 基のうち 4 基が近世の頃の岩陰墓で、人骨が蔵骨器に納められていた古墓と、人骨をそのまま岩陰に安置している古墓を検出しました。前者は蔵骨器内に複数体の人骨が納められていたこと（写真2）、そして一部の骨が納められていなかったことから人骨 1 体分を意識して集骨していないことが窺われます。後者の岩陰墓は風葬墓であると思われます。1 体のみ安置されている風葬墓が 2 基、複数体安置されている、時期不明の風葬墓が 1 基確認されました。1 体のみ安置されている風葬墓は沖縄陶器や銅製の簪、煙管が副葬品として伴っていました。複数体安置されている風葬墓には小児骨が含まれていました。

これら風葬墓の下部から珊瑚混じりの白砂層が堆積しており、更にその下部から八重山式土器や中国産青磁碗が出土する中世相当期の遺物包含層が確認されました。主に調査区の南側一帯にかけてこの遺物包含層が広がっていることが確認できます。目立った遺構は検出されませんでしたが、岩陰内から貝集積が 1 基検出されました。この貝集積の個々の貝は全て表側（殻頂部）を上にしていることから、意図的に置いたものと考えられます（写真3）。

今回の調査でもう一つ注目される点としては、風葬墓の下部に堆積していた珊瑚混じりの白砂層が、1771 年に先島地域一帯を襲った「明和の大津波」によって運ばれた海砂である可能性があげられます。標高 6～10 m の地点でこの白砂層が厚く堆積（写真4）していることや地震による地割れ痕が見られること（写真5）、近世の風葬墓と中世相当期の遺物包含層との間で検出されていることから、約 200～500 年前の間に於いて大量に、しかも一挙に白砂が押し寄せられたことが明らかになりました。これらの成果は今後の発掘調査において、大津波の痕跡を知る重要な手がかりになるかも知れません。



写真1 嘉良嶽東方古墓群 全景（北東から）



写真2 1号墓 厨子甕に藏骨された人骨
(南東から)



写真3 貝集積検出状況（北東から）



写真4 墓前土層断面



写真5 地割れ痕

宮国元島上方古墓群

事業名：県道上地保良線道路改良工事に伴う発掘調査

所在地：宮古島市上野字宮国

時代：近世～近代

調査期間：2008（H20）2月5日～3月21日

調査内容：本古墓群では現在、南に海が望める眺めが良い丘の急な崖斜面に、今のところ19基の墓が並ぶように見つかっています。この南約300mには15～17世紀の集落跡である宮国元島遺跡があり、一方、北約500mには現在の宮国集落があります。この内、工事で10基の墓が無くなってしまうため、発掘調査を行いその記録を残すことになりました。

昨年度の調査では、まず周囲を覆っていたジャングルを伐採して全体の様子を確認しました。その結果、岩陰を利用した風葬墓が多く、その中に散らばっていた陶磁器（日本・中国・沖縄産）、宮古で作った土器から、およそ18世紀から戦前まで造られたものと考えることが出来ました。この後、5基の墓について詳細な調査に入りましたが、調査は今年度も続けて行いますので、現在分かっている内容を紹介します。

3・5号墓という2基の岩陰墓からほぼ全身の人骨がそれぞれ足を曲げた状態で葬られたまま見つかりました。また、人骨の傍らに、3号墓では沖縄産陶器碗と青銅製キセル（煙管）、5号墓では土製キセルがそれぞれ副葬されており、これらからおよそ18世紀の墓であることが分かりました。ただ、3号墓の人骨は一部動かされており、別の遺体をさらに葬っていたものと考えられます。

從来、宮古ではこの時期の岩陰墓は、風葬により遺体を骨にしてから移動して、別の遺体を葬るというように考えられていたので、この古墓群の調査によりさらに具体的な様子が分かってくるものと思います。



調查後全景



3号墓全景



4号墓調査前



17号墓調査風景

えんがんちいき 沿岸地域遺跡分布調査

事業名：沿岸地域遺跡分布調査

所在地：沖縄県内

時代：グスク時代～近世・近代

調査期間：2007（H19）年9月から隨時

調査内容：本事業は沖縄県の沿岸地域に所在する埋蔵文化財の分布状況を把握するため
に実施しています。過去2年間にわたる調査の結果、貿易船等の船舶の海難事故に
関係すると考えられる遺跡（遺物散布地）や、石切場跡、塩田跡、魚垣跡、
古港の現状等が確認されました。平成19年度は宮古諸島・石垣島を中心とし
つつ沖縄本島の補足調査も実施しました。注目される成果として、宮古島では
来間島西岸沖海底で16世紀前半（中世貿易船の積荷）、吉野海岸沖では19
世紀後半（異国船の積荷）、多良間島の高田海岸沖で19世紀後半（オランダ
船ファン・ポッセ号の積荷）、石垣島・竹富島の中間海域の海底で18世紀後
半から19世紀前半（ヤンバル船？の積荷）の船舶の海難事故に関係すると考
えられる遺物散布地が確認されました。また、沖縄本島の南浮原島沖では19
世紀後半と考えられる船舶（異国船）の船体そのものの残骸が、陶磁器等の遺
物とともに残存している状況で確認されました。船体が確認されたのは、これ
までの調査ではこの南浮原島沖のみです。先島地方は石切場跡が沖縄本島に比
較してとても少ない傾向であることも確認できました。



来間島西岸沖海底遺物分布状況（明青花）

宮古島大浦湾石切場跡



石材散布状況

石垣島東岸沖海底遺物分布状況
(沖縄産陶器)



調査風景 (G P Sでの記録)



調査風景

アンチの上貝塚

事業名：アンチの上貝塚発掘調査

所在地：本部町瀬底島

時代：沖縄貝塚時代後期

調査期間：第1次 2006 (H18) 年 6月 26日～8月 11日

第2次 2007 (H19) 年 1月 29日～2月 9日

第3次 2007 (H19) 年 7月 3日～8月 10日

調査内容： 本事業は本部町瀬底島東岸で宅地建設が3件つづけて計画されたことから実施したアンチの上貝塚の発掘調査です。本遺跡は平成 14 年度に同じ理由で発掘調査が実施されており、大規模なイモガイ科集積遺構等が確認される等多大な成果を収めた遺跡として知られており、当センターの常設展示室にはその集積遺構の写真パネルを展示しています。今回の2年間3次にわたった発掘調査区域は、平成 14 年度に実施した調査区の南側に隣接しています。発掘調査の結果、貝塚時代後期（弥生時代～古墳相当）と考えられる小貝塚がいくつも確認されました。この小貝塚は石灰岩の割目などに廃棄された貝殻や魚骨等の食料残滓を中心に、土器や石器が混じって形成されています。さらに、小貝塚のいくつかは最上面から多量の枝珊瑚が混じった土壌が確認されました。この土壤は小貝塚でしか確認されません。このことから、当時のアンチの上貝塚人はゴミ捨て場である小貝塚への廃棄時に、海岸に漂着してたまっている枝珊瑚を小貝塚に被せたとも考えられ、興味深い成果と言えます。また、県内では類例

が少ない黒髪式土器と
考えられる九州の弥生
土器も出土しました。



調査風景



調査区遠景



遺物出土状況 1 (土器)



遺物出土状況 2 (石器)



小貝塚 5 完掘状況 (ベルト以外)

具志川島岩立遺跡西区

事業名：具志川島岩立遺跡発掘調査

所在地：島尻郡伊是名村具志川島

時代：縄文時代相当（沖縄貝塚時代前期）

調査期間：2007（H19）年5月7日～6月29日

調査内容：岩立遺跡西区は伊是名村に所在する具志川島の具志川島遺跡群のひとつです。

具志川島遺跡群は1970年代に初めて発掘調査が実施され、今回の事業で3度目の発掘調査となります。調査期間は平成18～21年度までの四次にわたって計画しており、自然崩壊が進行する岩立遺跡西区の発掘調査及び具志川島遺跡群の保存を検討しています。平成18年度は狭い岩陰から縄文時代後期相当と考えられる崖葬墓が確認され、県内でも類例がない貝製品が出土する等の成果がありました。平成19年度はさらに下層から縄文時代中期相当と考えられる生活跡が確認されました。主な遺構として、石蒸料理跡と考えられる炉跡（焼石遺構）や、食料を焼いたり、煮炊きした跡と考えられる炉跡（灰土遺構）、貝類等の食料残滓が廃棄されたと考えられる小貝塚やチョウセンサザエの蓋のみが集中した遺構等が確認されました。特に、灰土遺構はほぼ同じ場所に幾重にも重なり合って確認されたことから、同じ場所で何度も火を利用していたことがわかるという興味深い成果もありました。縄文時代中期相当と考えられる土層は断面の剥ぎ取りを行って、現在、当センターの常設展示室に展示しています。



発掘調査前（5層から）



サザエ蓋集中遺構



重なり合う炉跡（灰土遺構）



調査風景

みーぬ しん ぱる
箕 隅原 A 遺跡

事 業 名：平成 19 年度那覇西道路建設に伴う箕隅原 A 遺跡発掘調査事業

所 在 地：那覇市鏡水（自衛隊那覇駐屯地内）

時 代：縄文時代～グスク時代

調査期間：2007 (H19) 年 7 月 2 日～10 月 31 日

調査内容： 箕隅原 A 遺跡は現在の那覇空港東側、標高 5～8 m に位置しています。戦後の土地造成により完全に埋没した遺跡で、今回の調査でこの遺跡の特徴をある程度捉えることができました。

発掘調査の結果、今回の調査区内において遺物包含層が 400 m² の範囲で広がり、場所によってはかなりの厚さで堆積していることが判りました。遺物包含層が最も堆積している箇所で約 2 m あり、17 世紀以降の第 3 層、15～16 世紀頃の第 4 層、グスク時代初め頃の第 5 層、縄文時代の第 6 層と計 4 枚の遺物包含層が確認されました。また、調査区の中央部分では堆積状況が乱雑であったため、地震や地滑り等による二次堆積がグスク時代に起こったことも確認できました。

遺構については近世期に当たる鍛跡が多数確認され、それに伴う素掘り溝が南西～北東方向に 2 条、そしてグスク時代の柱穴が多数検出されました。

出土遺物については石器、土器、陶磁器、焼土、貝、炭が確認されています。遺物はコンテナ 7 箱にものぼり、最も出土しているのは焼土です。今回、この焼土の理化学分析を行ったところ、麦や稻の一部が混ざっていることが判明しました。今回の調査で焼土が農耕が活発になってくるグスク時代の遺物包含層から最も出土していることもあわせて考えると、沖縄本島における稻作、麦作の開始を検討していく上で無視することのできない遺物になってくるものと思われます。

最も古い縄文時代に相当する遺物包含層に関しては全体的に土器が少ないことから生活空間の縁辺部である可能性が高く、また旧地形は北東～南西方向に小谷が存在していたことから、廃棄された生活遺物が谷底に流れ込んだ可能性が考えられます。



石器出土状況



表土除去後遺構検出状況（南から）

き ち ない まい そう ぶん か さい 基地内埋蔵文化財分布調査

事業名：基地内埋蔵文化財分布調査

所在地：宜野湾市（普天間飛行場内）

時代：近世ほか

調査期間：2007（H19）年8月1日～12月28日

調査内容：この調査は、沖縄県内の米軍基地や自衛隊基地内にある埋蔵文化財（遺跡）の分布状況を把握するために、平成9年度から文化庁の補助を受けて実施している継続事業で、今年で12年目となります。

平成19年度は、普天間飛行場で人力による試掘調査と、古墓の分布調査を実施しました（対象範囲：5.1ha、試掘数：56箇所、調査期間：5ヶ月間）。

調査の結果、耕作に関連する小穴群（植栽痕）、土留めのための石積、古墓などの遺構や、沖縄産陶器、スンカンマカイ（碗）、土器等の遺物が確認されました。古墓は、鍾乳洞が陥没してできたと思われる窪地（陥没ドリーネ）を巧みに利用していることが判明しました。また、耕作土と思われる層も多く見つかっており、周辺が畑などに利用されていたことがわかっています。さらに、限られた範囲で、地山（マージ）が雨等の影響によって深い谷に流れ込んだと思われる灰色の粘土が厚く堆積している状況が確認されており、古環境を復元する上で貴重な成果となりました。





沖縄県内遺跡出土遺物保存処理

事業名：平成19年度県内遺跡出土遺物保存処理事業

対象遺物：沖縄県内出土の金属製品、木製品

事業内容：これまでに沖縄県内の遺跡から出土した金属製品、木製品の^{さび}錆や腐食による劣化の進行を防ぐため、昨年からとくに重要な金属製品、木製品、計54点の本格的な保存処理を行いました。それまでは埋蔵文化財センターで首里城跡京の内地区の金属製品の保存処理を行ったのみで、今回のように広くまとめて多数の金属製品・木製品の保存処理を行ったのは初めてのこととなります。

金属製品は那覇市の首里城跡、円覚寺跡、宜野湾市の伊佐前原第一遺跡など6遺跡25点を対象に行いました。まずは腐食を促す悪性の錆の除去により、飾り金具や鍍金具に施されていた鍍金が錆の下から現れ、当時の輝きが蘇りました。そして劣化が進んでいた金属製品も錆化による破損を防ぐための脱塩処理を行い、接合作業と樹脂による補強によって、できるかぎり当時の姿に復元しました。また保管用のアクリルケースも作成しました。

木製品は平成17年度～18年度にかけて調査した那覇市の渡地村跡から出土した木製品29点を全て高級アルコール法という保存処理方法で行いました。加えて接合作業と樹脂による補強で破損部分の修復も同時に行いました。

長期間、土の中で埋もれていた木製品は取り上げた後、温湿度の変化によってすぐに変形、腐食してしまうデリケートな遺物です。しかし、今回の保存処理により、出土した状態に近い形での保存、保管が可能になりました。このことによって從来まで公開展示することが極めて難しかったこれらの製品が、今後は博物館などの展示施設で目にする機会が多くなっていくものと思われます。

発掘調査のきっかけ（契機）とは

一概に発掘調査といっても、そのきっかけ（契機）や原因がいくつかあります。そもそも、遺跡などの発掘調査は考古学的な手法を用いておこなうわけですが、それによって過去の人たちの生活や行動を復元し、当時の歴史や文化を明らかにしていくことを目的にしています。

大学の考古学研究室などの研究機関がおこなう発掘調査は、「学術調査」とも呼ばれ、目的意識（研究テーマ）を持って取り組みます。それに対して行政機関（当センターや市町村教育委員会など）がおこなう発掘調査は「行政発掘」と呼ばれ、その動機や原因によって大きく二つに分けることができます。

ひとつは、先人の残した貴重な文化的遺産である遺跡（埋蔵文化財）を後世に伝えるため現地保存を目的とした確認調査があります。具体的には、国や県・市町村指定の史跡（文化財指定を受けた遺跡）の保存・活用を目的とした史跡整備に伴う遺構確認調査、保存を目的に遺跡の範囲や性格などを明らかにする遺跡範囲確認調査がそれに相当します。

もうひとつは、道路工事や土地改良の諸開発に伴う記録保存を目的とした発掘調査で、開発のために消滅する遺跡を事前に発掘調査し、綿密な記録作成をおこないます。

このように、発掘調査にも様々なケースがありますが、いずれの場合も遺跡にメスを入れることには変わりがありません。発掘調査がおこなわれた遺跡は二度と元に戻らないですから、より慎重な発掘調査をおこなう必要があります。

現在、県内では当センターや市町村教育委員会、大学の考古学研究室などが実施している発掘調査が毎年数十件ありますので、機会があれば発掘調査現場に足を運んでみてください。

県内の発掘調査情報に関しては以下にお問い合わせください

- | | | |
|----------------|------|------------------|
| ○沖縄県立埋蔵文化財センター | 調査班 | TEL 098-835-8752 |
| ○沖縄県教育庁文化課 | 記念物班 | TEL 098-866-2731 |

平成 20 年度発掘調査等予定一覧

| 遺跡名・調査名 | 調査目的・原因 | 調査予定期 |
|-----------------|------------------------|--------|
| 具志川島岩立遺跡発掘調査 | 保存目的の確認調査 | 5月～6月 |
| 円覚寺跡発掘調査 | 円覚寺跡保存修理に伴う発掘調査 | 7月～8月 |
| 箕隈原A遺跡発掘調査 | 道路建設工事に伴う発掘調査 | 7月～11月 |
| 基地内埋蔵文化財分布調査 | 基地内における埋蔵文化財分布状況の確認調査 | 8月～1月 |
| 首里城跡発掘調査（錢藏跡） | 国営首里城公園復元整備に伴う発掘調査 | 9月～2月 |
| 沿岸地域遺跡分布調査 | 沿岸地域における埋蔵文化財分布状況の確認調査 | 7月～11月 |
| 首里城公園（中城御殿）発掘調査 | 県営首里城公園整備に伴う発掘調査 | 12月～2月 |
| 海軍病院建設予定地内発掘調査 | 海軍病院建設に伴う発掘調査 | 6月～2月 |
| 宮国元島上方古墓群発掘調査 | 県道上地保良線道路改良工事に伴う発掘調査 | 12月～1月 |

メモ

平成 20 年度企画展
「発掘調査速報展 2008」

2008（平成 20）年 7 月 29 日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター
住所 沖縄県中頭郡西原町上原 193-7
電話 098-835-8752
FAX 098-835-8754

第30回文化講座
発掘調査速報 2008

【日時】 8月2日（土）午後1:30～4:00
【場所】 沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室
【講師】
首里城公園発掘調査（綾門大道地区） 金城亜信
首里城跡発掘調査（御内原北地区） 仲座久宣
首里城公園発掘調査（旧中城御殿跡） 上地 博
アンチの上貝塚発掘調査 片桐千葉紀
沿岸地域遺跡分布調査
基地内埋蔵文化財分布調査 中山晋
新石垣空港予定地内遺跡発掘調査 山本正昭
箕瀬原A遺跡発掘調査

- 開所時間 午前9時～午後5時まで（入所は午後4時30分まで）
- 休所日 毎週月曜日、国民の祝日（こどもの日、文化の日を除く）
年末年始（12月28日～1月4日）、懇意の日（6月23日）
※祝日と月曜日が重なった場合は、翌火曜日も休所
- 交通 ◇沖縄自動車道西原ICより車で7分
◇市外線バスターミナル発 那覇バス97番
「琉大附属病院前」下車徒歩1分